

ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

(24)

中村周平

これまで私が事故について触れてきたこと・・・それは、これまでの自身の経験に基づく「感覚」に近いようなものでした。学校側やチームと話し合っていく中での自身の感情の変化や、時間の経過と共に変化してきた事故への思い。自分の目に映ったもの、その時々を感情を言葉にしてきました。つまり、自分を主人公とした物語を綴ってきたのだと思います。それが間違いだったということではなく、なぜ事故後にそういったことに至ったということを心情的なところを出発点とすることで考えることが私の持っている唯一の術でした。

また、講演などで想いを情報発信していく中で相手への伝わりやすさを重視するあまり、自分自身が「原因究明の困難さ」、「補償制度の不備」という単一的な視点でこのスポーツ事故による紛争を捉えていたことも、論文作成の過程で改めて気付くことになりました。

「既存の制度における補償額が少ない」→「経済的に困窮する」→「裁判という手段しか残っていない」→「訴訟」

という決めつけに近い一連の流れが私の中に出来上がっていました。そして、その過程において大切な

ことが抜け落ちていることに考えが及んでいませんでした。スポーツ事故における「責任の所在」を明確にできていなかったのです。ラグビーが危険だということはある程度は把握しながら当該スポーツに参加していたプレイヤー側。事故というリスクが付いてまわるスポーツだということ認識しながら指導に当たっていたチームや学校側。そのどちらか、もしくは双方だけで事故のやり取りや責任について考えていくことに疑問を抱かずにはいられませんでした。しかし、そういった疑問を持ちながらも学術的なものはもちろんですが、明確な答えというものをいれずにいたことも事実でした。おそらく、「誰か」という特定の人間や関係者だけに責任がいくことに心のどこかで違和感を覚えても、その違和感を凌ぐだけの説得力のある答えを自分の中に持っていなかったんだと思います。

「事故を防ぐことができない以上、誰か個人が責任を負わなければ・・・この現状は避けて通ることができないのか」

その違和感に正面から向き合ってくれたのが、同志社大学での学びでした。論文作成の過程で担当教員の川井先生が重視されていたことの一つに、海外における取り組みを把握することがありました。日

本で起きていることの多くは海外でも起きている。その現状に対して海外ではどのような取り組みがあるのか。興味の大きさは裏腹に、私のみでそれを調べるだけの度量も知識もありませんでした。川井先生は海外で研究員として活動されていた経験もあり、海外の研究者の方々と共同研究という形で著書や論文を複数発表されていました。どうすれば最新の海外の動向が把握できるのか、知りたい情報を検索する方法は。一つひとつ指導していただきながら、地道に情報を模索していきました。また、海外の方が持つスポーツ事故に対する社会的認識(自己責任論や報道の在り方など)といった、論文や資料では把握できない「肌感覚」の様子を共同研究者の方からヒアリングしていただくことができました。

「英語は高校以来。英語のサイトなんて検索したこともなかった。それこそ、単語を一つひとつ調べへんと全然わからへん。でも、やればやるほどこれまでモヤモヤしてたことが晴れていくみたいや。」

アメリカやニュージーランド、オーストラリアといったスポーツ先進国の情報を調べていく中で明らかとなったこと。一つは、海外でも日本と同様にスポーツ事故は起きていたということでした。とくに、2012年にアメリカで起きたNFLに対する集団訴訟をきっかけに、脳震盪については様々な論文や報道が出ていまし、少しアメリカのスポーツ界がその問題に対して非常に神経質になっているような印象も受けました。ラグビーにおいては、年間事故数の違いこそ把握することはできませんでしたが、スクラムやタックル時に深刻な重症事故が起きていることが明記されていました。そして、もう一つはその事故のリスクを「分散」する仕組みが構築されているという事実でした。